

はじめに

企業と社会フォーラム (JFBS) 学会誌第9号は、「サステナビリティ人材の育成と経営教育」をテーマとした昨年の第9回年次大会での議論を踏まえ、その後の研究成果、さらに投稿論文などを加え構成されている。

過去20年ほどの間にCSRは重要な経営課題として認識されるようになったと同時に、研究・教育課題としてもグローバルに広がり、新しいマインドセットをもった研究者や実務家の育成が求められるようになってきた。プライベートな企業が国内外の社会的課題に取り組むことには無理がある、あるいは取り組むべきではないと長らく考えられてきたが、企業に求められる役割・責任が変わり、今やビジネスのもつ強み(技術力、ブランド力、ネットワーク力など)がそういった課題の解決に貢献するという認識が広がり、さらにサステナビリティ・マインドをもった人材の育成が求められるようになってきた。

サステナビリティという視点は、企業経営のあり方や教育に新しいビジョンを提示していくポテンシャルをもっている。CSR、サステナビリティの課題に取り組んでいくに当たっては、複雑にかかわりあう経済・社会・環境の課題にトータルにアプローチする発想が求められる。とくに今回のような新型コロナウイルスが企業社会につきつけたさまざまな課題にどう対応し、持続可能な社会をつくっていくか。SDGsブームを越えて、それらを踏まえた新しいシステムを構築していく必要に迫られている。こういったマインドをもつサステナビリティ人材の育成には、従来のマネジメントスキルの教育にとどまらず、幅広くステイクホルダーと議論を行っていくことが期待されている。しかしながら、日本ではまだそういった認識が定着しているとは言えない。

国際的にサステナビリティへの関心が高まる中、多くの国の大学・ビジネススクールには実務界から責任あるリーダーシップと高い倫理意識をもった卒業生を育てることが期待されている。ビジネス教育の国際認証AACSBは、今や各ビジネススクールにその教育・研究においてCSR関連の課題に取り組むことを求めている。また責任ある経営教育原則PRMEは、国連グローバルコンパクトを踏まえた責任ある企業経営をリードするビジネスリーダーを育てることを使命とした組織で、700を超える大学、ビジネススクールが調印している。日本ではまだこうした国際的な取り組みはあまり理解されていない。CSR/サステナビリティ教育は、大学と企業、国際機関、NGOなどが協力しながら取り組み、ローカル/グローバルな課題の解決に貢献していく人材を育成していくことが求められている。

こうした課題について議論するため、企業と社会フォーラム第9回年次大会が2019年9月5日(木)、6日(金)の2日間にわたり早稲田大学にて開催された。今大会にも日本のみならず、ドイツ、スペイン、オーストラリア、タイ、台湾、中国、バングラデシュ、香港から、学界、産業界、労働界、NPO/NGOなど各セクターにわたり多くの参加者が集まった。中でも、アジアを拠点にサステナブル経済の構築に取り組むB Corp AsiaとJFBSの連携によって、30名の訪問団がタイ、台湾から参加し、特別セッションも開催された。それぞれの立場からサステナビリティ人材の育成

について多面的な議論が繰り広げられた。

大会はドイツの Cologne Business School にて学長を務める Elisabeth Fröhlich 教授、およびグローバル・コンパクト・ネットワーク・ジャパン代表理事の有馬利男氏による基調講演、それに引き続いての全体セッションから始まった。企画セッションでは「企業における『ビジネスと人権』教育・研修の課題」、[Sustainability Leadership Training]、[Higher Education for Sustainability]、[サステナビリティ人材の育成におけるメディアの役割]をテーマに、企業、大学、メディアなど各機関が進める具体的取り組みの紹介とパネルディスカッションが行われた。

自由論題報告セッションでは「Sustainability in Management Education」、[日本企業の CSR 経営]、[Global B Corp Movement and Asia Development]、[CSR Management]などのセッションに分かれて、全部で22本の研究報告・ケース報告がなされ、活発な議論・交流が行われた。

本大会では福川恭子（一橋大学大学院教授）、Schmidpeter, René (Professor, Cologne Business School, Germany)、谷本寛治（早稲田大学教授）がプログラム委員会を構成し、大会プログラムの立案、自由論題報告および Doctoral Workshop のプロポーザルの審査、企画セッションの司会などを担当した。

本学会誌にはこの年次大会のテーマに関する「イントロダクション」、さらに「招待論文（論文および事例紹介・解説）」、「投稿論文（論文および事例紹介・解説）」が収められている。投稿論文に関しては、JFBS 編集委員会（委員長 國部克彦神戸大学教授）による審査（double-blind review）が行われ、今回は投稿された7本の論文のうち2本が掲載されることとなった。今後も積極的な投稿を願っている。

さて、次回第10回年次大会では、「サーキュラーエコノミーを目指して」(Circular Economy Transition: Exploring the Institutional, Organizational & Behavioral Dimensions)をテーマとして議論を行う。これまでビジネスは、生産—消費—廃棄と直線的に展開するリニアなモデルで行われてきた。しかしこの伝統的な産業モデルでは、もはや持続可能な経済社会を実現することはできない。資源獲得から生産、輸送、エネルギー消費、廃棄のプロセスと経済成長を切り離して議論している、循環型経済（サーキュラーエコノミー）に移行していくことは不可能である。サーキュラーエコノミーに向けた理論構築、そして実現可能な政府の政策や企業における経営戦略の策定、さらにセクターを超えたコラボレーションが求められており、本大会において広く議論する予定である。具体的には、プラスチック問題、食品ロス、サステナブルファッション、再生可能エネルギー、持続可能な農業、シェアリングなど、多くの課題がある。

本来であれば、この大会は2020年9月4～5日に開催される予定であったが、新型コロナウイルスの影響により1年延期し、2021年9月初めに開催することとなった。同感染症の一日も早い収束を願うとともに、多くの研究者、実務家が再び集まり、活発な議論が再開できることを願っている。大会の内容や申し込みについては、JFBSのウェブサイトを参照いただきたい <https://j-fbs>。

iv はじめに

jp/。

最後に、今号も発行に当たっては千倉書房に大変お世話になった。記して感謝の意を表したい。

2020年6月

企業と社会フォーラム会長

早稲田大学商学大学院商学部教授

谷本 寛治